

CONTENTS

- 特集・1
イメージライブラリーの10年
- 特集・2
ライブラリー・セレクション
- タイトル・デザインの世界
- 作品紹介

10年間の総利用者数・・・・・・延20万人
 所蔵タイトル数・・・・・・7627タイトル
 学生利用率・・・・・・86%
 (利用カード発行率による)

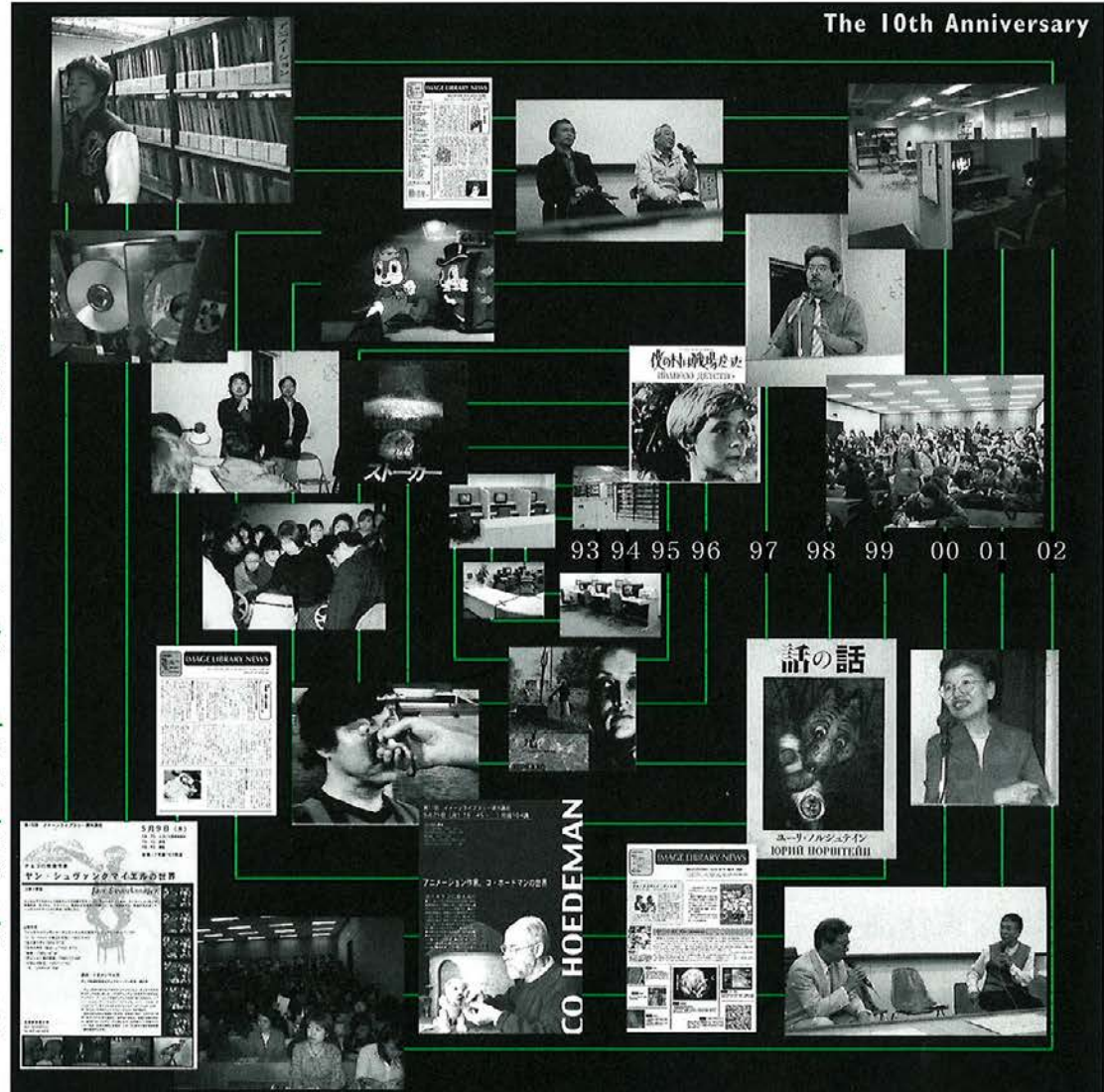
IMAGE LIBRARY NEWS

●●イメージライブラリー・ニュース 2002年6月 第11号●●

イメージライブラリー・ニュースは4月・6月・9月・11月に発行の映像に関するミニ情報誌です。バックナンバーは館内でご覧になれます。

The 10th Anniversary

- 93- 開館～全学的な利用の開始～
試用期間、視聴ブースは3箇所のみでスタート。
収集の中心的メディアはLDであった。(1400)
- 94- 学生作品、CD-ROMの収集を開始。
所蔵リストを整備する。
(2100)
- 95- 導入当時、最新といわれたCP検索も処理
速度に問題があり改善を行う。また利用者の増
加に伴い視聴ブースを増設する。(2800)
- 96- 所蔵作品目録1996年版を作成。
タイトル、ジャンル、制作者別に再編集したカウ
ンター閲覧用リストを整備。(3500)
- 97- 映像上映を主軸にした講座を開始。
第1回目の講座は「アンドレイ・タルコフスキー
水と光の映像表現」(4300)
- 98- 所蔵作品目録1998年版を作成。冊子体で
の配布を行う。
(5000)
- 99- 「イメージライブラリー・ニュース」の発
行を開始。カナダ国立映画庁(NFB)の16ミリ映
画フィルム495本の寄贈を受ける。(6000)
- 00- 所蔵作品目録2000年版を作成。課外講座
では映像作家の松本俊夫氏、コ・ホードマン氏が
来校される。DVD視聴ブースの整備。(6900)
- 01- 「イメージライブラリー・ニュース」紙面
を拡大して発行する。収集の中心となるメデ
ィアはビデオ、LDからDVDへ移行。(7600)
- 02- CPシステムの老朽化に伴い新規システムを
検討。



* () 内の数字は所蔵タイトル数

特集・1

イメージライブラリーの10年

1990年に映像学科の開設に伴い、映像資料を備えた施設が必要だということで、イメージライブラリーの設置構想はスタートしました。約2年の準備と試用期間を経て1993年5月に全学的に開館したのです。ゆえに今年、イメージライブラリーは開館10年目を迎えます。

9割以上の学生は入学から卒業までの間、つまり在籍期間は4年であり、イメージライブラリーには常に新しい水が流れ込み、時間の経った水はほとんど留まらないこととなります。

イメージライブラリーの業務を通じて映像教育の一端に携わる時、積み重ねる時間が4年であることに多少の残念さを感じないわけではありません。イメージライブラリー内での視聴や資料の貸出サービスはもとより、より一層、学生の皆さんには制約されることなく映像作品のおもしろさを知ってもらうために、二つの企画を続けています。

まず一つは、映像を「見る」おもしろさです。「課外講座」での大スクリーンを使った作品上映を通じて、「おもしろい！」を体験してください。

二つ目は、「知る」おもしろさです。映像作品に関する資料の記事は、例えば作品に心を揺り動かされたいわばバックグラウンドをひも解くための資料として「イメージライブラリー・ニュース」を発行しています。

この10年間は、常に新しい水が流れ込んでいる状態であるにも関わらず、学生利用者の皆さんの映像に対する興味や知識の質の高さは不思議と年々向上して来たように思います。毎年、入学式の翌日には、早速ライブラリーを訪ねる何人かの熱心な新入生がいます。また利用される資料のベスト10には、新旧に関わりなく不動のタイトルが上位を占めています。さらに、全てのIDカードの検索端末へのアクセス回数は、コンピュータ上でカウントされているのですが、学生利用者の中には業務上頻りにアクセスするスタッフの利用回数を上回る人さえいます。

町のレンタルビデオの感覚で利用している人もいるのだろうと思います。しかし、別の見方をするとレンタルビデオで見れるソフトはいつでも見るチャンスはあるのだけど、イメージライブラリーにしかないソフトは在学中の4年間にしか見るチャンスがありません。映像作家に直接交渉をして購入できた作品や、海外の作家がライセンスを結ぶオフィスを通じて購入した作品などもその類いです。(その一部を特集2でご紹介いたします)

イメージライブラリーの所蔵タイトルは2002年3月末で、約7600を数えます。1日1本の映画を見るとして、全てを見終わるには20年以上かかる計算になります。

数だけが問題ではありませんが、4年間に自分なりのテーマを見つけて、この7600タイトルの映像に挑んでみてはいかがでしょうか？

(下川 久美香)

Image Library Selection

イメージライブラリー・セレクション

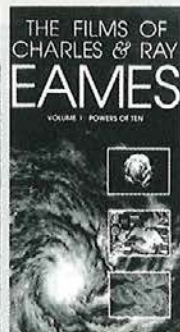
イメージライブラリーでは毎年約700タイトルの作品が新たに収録されており、開館してから10年目の現在、約7,600タイトルの映像作品が収録されています。その中には視聴する機会のない貴重な作品もあります。今回はライブラリーでしか見ることのできない作品を中心に紹介します。
文/構成 狩野志歩

チャールズ&レイ・イームズ作品 VHS/全27巻

Charles and Ray Eames

近年のミッドセンチュリー・デザイン・ブームの先駆けともなったイームズ夫妻は、アメリカン・モダンデザインを代表するデザイナーとして再評価されている。彼等の合理的でシンプル、かつ有機的で温かみのある家具や建築は、インテリア雑誌でも特集され、TVドラマやCMでも見かけたことのある人も多いだろう。

イームズ夫妻がデザイン以外に、70本以上もの映像作品も手掛けているという事実はあまり知られていない。多くは自らのデザインした椅子の商業作品(「イームズ・ラウンジ・チェア」)や、展示デザインに携わった博覧会の為の映像(「IBM at the fair」)等の委嘱された作品だが、随所に彼等のデザインセンスを見ることが出来る。その独特な編集や構図の取り方、おもちゃや小物への愛情溢れる視線はデザインのみならず勉強になる。

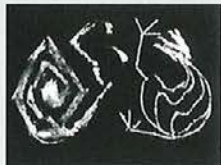


右/ザ・フィルム・オブ・イームズ 全5巻
左/イームズ・コレクション 全22巻

「パワーズ・オブ・テン」↑イームズの代表作ともいえる作品。ピクニックの男を中心にズームアウトとズームインによって展開される極大と極小の世界は、宇宙から細胞までのスケールについて感覚的に捉えることができる。



**Mr. Frog
Went
A-Courting**



上「変身」キャロライン・リーフ
下「プリンキティ・プランク」ノーマン・マクラレン

NFBCのアニメーション作品

VHS/全178巻

The National Film Board of Canada

NFBC (National Film Board of Canada =カナダ国立映画庁)は、カナダの文化をカナダ人や他国の人々に知らしめることを目的に1939年に設立された国営の映画制作スタジオ及び配給機関である。劇映画、教育映画、ドキュメンタリー、アニメーションなど手掛けるジャンルは広いが、なかでもアニメーションはその実験性やレベルの高さにおいて世界的にも評価が高く、アカデミー賞をはじめ多くの映画祭で受賞を重ねている。この華々しい実績の基礎を築いたのが、1941年にアニメーション部門に招かれたノーマン・マクラレンである。彼はアニメーションの道具のほとんどないスタジオで、フィルムに直接キズをつけて描く方法など、低予算でシンプルな道具でできるユニークな作品を次々と生み出していった。又、若手の育成にも励み、彼の下からは砂のアニメで知られるキャロライン・リーフなど、個性的な作家たちが多く育った。様々な素材や技法を模索して生まれた彼等の作品群は繰り返し何度でも見たくなる。又、このビデオシリーズには実際の制作の様子なども収められていて、資料としても貴重なものとなっている。

松本俊夫作品

VHS/全13巻

Toshio Matsumoto

松本俊夫は、戦後日本に入ってきたヨーロッパのアバンギャルド映画に触発され、日本において最も早く前衛・実験映画を手掛けた一人である。現代音楽の作曲家・武満徹やビデオアーティスト・山口勝弘らと共同で映像作品を制作したのを始めに、現在までに100本以上もの作品を発表している。新しいメディアや技術も積極的に取り入れ、日本におけるビデオアートの先駆者でもある。又、アバンギャルドとドキュメンタリーの統一を目指し「前衛記録映画論」を発表するなど、理論家・批評家としても活躍。

この作品集は初期のドキュメンタリー作品からビデオ、マルチプロジェクトの作品など代表的な作品が収められている。

※以下の長編作品は<映画>コーナーにあります。
「薔薇の葬列」「修羅」
「ドグラ・マグラ」「十六歳の戦争」



「石の唄」



「モナ・リザ」



「ボルタンスキーを探して」→
C.ボルタンスキーは過去の記憶や失われたものをテーマに作品を制作する。この映像では、亡きクリスチャン・B(ボルタンスキー)の足跡を辿るという形式をとり、アーティストのイメージが蒐集・分類される。



「イヴ・サンローラン」↑

アート・ドキュメンタリー・シリーズ VHS/全44巻

Art Documentary

日本ではあまり馴染みのないアート・ドキュメンタリー(美術や美術家に関するドキュメンタリー)は、欧米では一つのジャンルとして専門の映画祭がある程認知されている。このシリーズは、モントリオールの国際アートフィルム映画祭で上映された作品をユーロスペースが日本に紹介するため、1995年から始めたアート・ドキュメンタリー映画祭からビデオ化されたものである。

アート・ドキュメンタリーといっても、所謂美術や美術家を紹介するだけではなく、アーティストすら出てこないもの、フェイク・ドキュメンタリーなど、映像それ自体がアートとして意識して作られているという所に特徴があり、アーティストと映像作家のコラボレーション的な要素が強い。対象となるアーティストもルイズ・ブルジョアからロバート・メイプルソープ、イヴ・サンローラン、ブライアン・イーノ等々。広義にわたるアートの捉え方もアート・ドキュメンタリーの多様性に繋がっている。

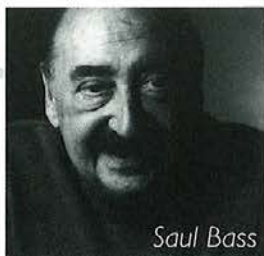
タイトル・デザインの世界

タイトル・ロゴやクレジットを魅力的に見せながら、映画本編への期待を煽っていくタイトル・デザイン。興味を持っている人も多いことでしょう。最近では『セブン』のタイトル・デザインを手掛けたカイル・クーバーが一躍有名になりました。『トレインスポッティング』のタイトルはクリエイティブ集団tomatoが制作しています。タイトル・デザインが注目され、各社が力を注ぐようになったのは1950年代中頃から。ソール・バスという一人のデザイナーの出現によります。バスの作品を中心に、有名なタイトル・バックを紹介していきましょう。

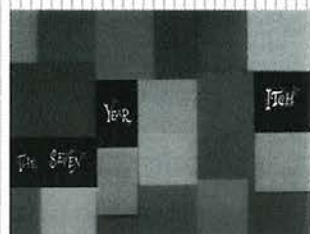
文・構成/木村英佐子

ソール・バス 1920-1996

グラフィックデザイナー及び映画作家。タイトル・デザインのデビューはotto・プレミンジャー監督の『カルメン』。60本以上の映画のグラフィック・シンボルと40本以上の映画のタイトル部分を制作。映画監督作品に『なぜ人間は創造するか』(アカデミードキュメンタリー短編賞)、『クエスト』(モスクワ映画祭金メダル)、『フェイズIV』がある。ユナイテッド航空、ミノルタカメラ、コーセー等多くの企業のトレード・マークをデザインしている。



Saul Bass



『七年目の浮気』1955

既婚男性の84.6%が襲われるという七年目のカウミ(原題"THE SEVEN YEAR ITCH")。ロゴの"T"の文字がわき腹(?)をかか仕草がかわいらしい。



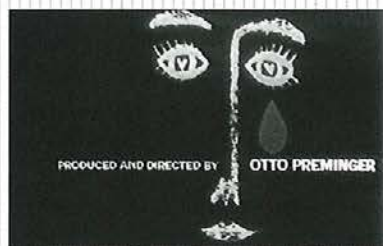
『黄金の腕』1955

エルマー・バーンスタインのモダン・ジャズに合わせ、白いラインが闇を切り裂いていくクールなオープニング。



『八十日間世界一周』1956

5分間に及ぶこのエンド・クレジットによって、観客はもう一度、ちょっとした世界旅行を楽しむことができる。



『悲しみよ』

『こんにちは』1957

散る花びらが少女の涙へと変わる感傷的なタイトル。



『グラン・プリ』1966



『めまい』1958

他の主なタイトル・デザイン『カウボーイ』『大いなる西部』『或る殺人』『北北西に進路を取れ』『サイコ』『オーシャンと十一人の仲間』『スパルタカス』『栄光への脱出』『ウェスト・サイド物語』『ザッツ・エンタテインメントPART2』『ゲープ・フィア』『グッドフェローズ』『エイジ・オブ・イノセンス』

モーリス・ビンダー 1925-1991

銃口から007を覗く有名なショットを考え出したのがこの人。亡くなるまで、007シリーズのほとんどのタイトル・バックを制作し、ファンの目を楽しませた。他の主なタイトル制作は『マックス・モン・アムール』『ラストエンペラー』など。



Maurice Binder



『太陽がいっぱい』1960

絵葉書とサイン。カフェに座る主人公の姿へと流麗に展開する。音楽はニーノ・ロータ。



『007 ドクター・ノオ』1962



『シャレード』1963

音楽/ヘンリー・マンシーニ



『紳士泥棒』

『大ゴールデン作戦』1966

バート・バラックの音楽とピーター・セラースの唄によって泥棒フォックスが活躍するタイトルは、何度見ても楽しい。

デパティエ=フリーレング

David H. DePatie - Friz Freleng



『ピンクの豹』1963

音楽/ヘンリー・マンシーニ

ブレイク・エドワーズ監督の『ピンクの豹』のタイトル制作をきっかけに、短編アニメ・シリーズをスタートさせる。映画シリーズのタイトル・アニメの多くは、デパティエ=フリーレングと後述のリチャード・ウィリアムズのどちらかが手掛けているので、その作風の違いも楽しめる。

リチャード・ウィリアムズ

Richard Williams



『カジノロワイヤル』の華やかなタイトルが印象的なウィリアムズ。ゼメキス監督の『ロジャー・ラビット』ではアニメーション・ディレクターを務めた。

『何かいいことないか』

『子猫ちゃん』1965

音楽/バラック 唄/トム・ジョーンズ

■参考資料・出典■

- 『世界アニメーション映画史』伴野孝司・望月信夫 (ばるぶ)
- 『世界のグラフィックデザイン10 ソール・バス』(ギンザ・グラフィック・ギャラリー)
- 『季刊 映画宝庫 第3号』(芳賀書房)
- ドキュメンタリー『007のオープニング・シルエット』(DVD『007は二度死ぬ』に収録)

「カスパー・ハウザーの謎」

1974年 西ドイツ 109分
監督/ヴェルナー・ヘルツォーク
俳優/ブルーノ・S
ヴァルター・ラーデンガスト 他

風が金色の草原を吹き抜ける風景が唐突に映し出され、「あたり一面に、静寂という恐ろしい叫びが聞こえないか。」と字幕が問いかける。地から沸き起こった沈黙が大気に満ちていくようなこの風景は、この世界のどこでもあり、どこでもないような不思議な美しさである。我々は、突然この異世界に投げ込まれ、その世界にひきこまれていく。

これは、牢の中につながれ、自分以外の人間を知らずに成長したカスパー・ハウザーという実在の男と、実際の事件を描いた映画である。物語は、どこからともなく現われた一人の男がカスパーを牢から解放するところから始まる。男は彼に言葉を教えると、世に放り出して立ち去っていった。人々は、概念というものを全くもたないカスパーに信仰や論理をおしつけて、彼等の概念のなかに捉えようと空回りする。カスパー・ハウザーは一体何者なのか。カスパーに対する干渉は延々と続く。カスパーは、文明世界に構築されたすべての虚構を滅却した世界を、ただひとり見つめ続ける……。

カメラは第三者がただ観察をするような視線で、カスパーと彼を取り巻く人々を映し出していく。ただそこで起きている出来事を、単調に、無感情ともいえるほどの冷静さをもって肯定も否定もせずに見つめる視線は、意味もなく悲劇が起こり得るこの世界を見つめる神の視線を想像させる。その視線を通して、何度も映し出される風景は、どれも茫漠として夢幻のように、ただひっそりとそこに存在している。その気配はカスパーのそれと同じであり、事象の真理に届く光である。そして、それは概念だけにその存在を預ける人々の滑稽さを、残酷に突き彫りにしていくのである。

最後にカスパーが語る挿話がある。サハラ砂漠を渡るベル人の商隊が、砂丘に行く手を阻まれて方向を見失ってしまったときに、盲目の族長がこう言うのである。「目指す町はこの向こうにある。砂丘はただそこにあるように見えるだけだ。」と。族長は、まさにカスパー自身である。砂丘を越えてたどり着いた町に何があるのか。それはカスパー自身にもわからないままである。

(田中友紀子)



「ジュリアン」

1999年 アメリカ 100分
監督・脚本/ハーモニー・コリン
出演/ユエン・ブレナー
クロエ・セヴィニー 他

この作品「ジュリアン」は、ラリー・クラーク監督作品「キッズ」で、脚本家としてデビューしたハーモニー・コリンによる「ガンモ」に続く監督作品であり、あのラース・フォン・トリアーで有名な「ドグマ95」マニフェストの認証を受けた作品である。

デンマークにて生まれた、この映画運動体「ドグマ95」であるが、このドグマ映画であるためには、「純潔の誓い」と呼ばれる十戒に則したものでなくてはならない。撮影は手持ちカメラに限られており、照明も人工照明ではなく自然光のみ、故意的なアクションシーンも認められず、小道具やセットも持ち込んではいけない。ハリウッドの映画制作手法への批判であり、また原点への回帰でありながらも新しい可能性を目指した運動体である。

アメリカ映画としては、初の「ドグマ95」映画となる「ジュリアン」も、この十戒に則した作品である。全編に渡って使用されているカメラは小型DVカメラであり、手持ちのため手ぶれが激しく、フレームも逸脱している。見る人によっては、その映像に酔ってしまう程である。DVカメラで撮影されているにも関わらず粗い粒子が画面に見えるのは、DVで撮影された映像を8? 16? mmフィルムにテレシネした上に、35mmにブローアップしているせいであり、そのため映像は非常に希薄になっている。また、スチル(写真)や、小型監視カメラも多用されており、編集においてもカットアップ、リミックス、サンプリングが見てとれる。

幾つもの多種多様なイメージが重なり合い、壊され、切れ刻まれ、微妙な均衡のもとに再構築されていく。また、非常に写真的イメージが強く、フレーミングは映画というよりも写真でいうスナップショットに近い。そうすることで、映画を見る側のイメージの喚起に幅が生まれてくる。

先程、映像が希薄だと書いたが、それは否定的なことではなく、肯定すべきことであり、この映画においては重要なことに思える。希薄であるが故に見えてくるもの。希薄であるがために映像と見る者との間に近づくことのできない距離が生まれる。その距離が映画の登場人物への感情移入を拒絶し、プロットが保たれる。ストーリーに関しても、説明的な要素が殆ど省かれており、イメージが重要であることが見てとれる。非常に好き嫌いがはっきりわかってしまう映画かもしれない。が、それが新しさの証でもあり、万人が肯定したところには新しさは存在しないと、言ってもいいかもしれない。

ストーリーの内容に関しては、ここで説明するよりも実際に見てもらったほうがいいので省きますが、映画監督である奇才ヴェルナー・ヘルツォークが出演しています。怪演です。そして、ジュリアンはカオスであり、純粋そのものです。

(映像学科研究室・助手 宮下晃久)

作品介绍

シネマ将軍

編集委員 板屋 緑一映像学科 教授
下川久美香 狩野 志歩
木村美佐子 田中友紀子

イメージライブラリー・ニュース 第11号 2002年6月発行

武蔵野美術大学 イメージライブラリー
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
TEL/FAX 042-342-6072
禁断複製・転載